

11 年度 DTM 講座 (第 5 回)

1



ドの音を基準として一列に並べると、以下のようになる。

ド ド# レ レ# ミ ファ ファ# ソ ソ# ラ ラ# シ

各音の鍵盤上の間隔を「半音」という。また、半音差が2つになるとき、その間隔を「全音」という。このとき、ドとレの間隔は全音だが、ミとファ、シとドの間隔は半音であることに注意。言葉で書くと分かりにくいですが、ピアノロール上で見ると視覚的にも分かりやすい。



また、音程上の間隔を「度」という。ドを基準とすると、ミは3度、ソは5度…など。

詳しい説明は Wikipedia の「音程」や

http://www-antenna.ee.titech.ac.jp/~hira/hobby/edu/sonic_wave/interval/index-j.html

このページを参照。

2 スケール

スケールは日本語で言う音階にあたる。名前の通り音の階段。

最初に挙げた「ド ド# レ レ# … ラ ラ# シ」もスケールの1つで、「クロマティックスケール」という。半音(chromatic)で作られたスケールのこと。また、全音(whole tone)で作られた「ホールトーンスケール」もある。

音階と聞いて、たいていの人は「ドレミファソラシド」を思い浮かべる。

このスケールは以下のような全音と半音で構成されている。

ド←全→レ←全→ミ←半→ファ←全→ソ←全→ラ←全→シ←半→ド

つまり各音の間隔は「全-全-半-全-全-全-半」となる。このようなスケールをメジャースケールという。

この間隔の決まりを守れば、このスケールの最初の音は何でも良い。

「ドレミファソラシド」はド(C)の音から始まっているのでCメジャースケールと呼ばれる。

メジャースケール以外に、マイナースケールがある。

マイナースケールには3種類あり、それぞれナチュラルマイナースケール、ハーモニックマイナースケール、メロディックマイナースケールと呼ばれる。

それぞれの並びは、「全-半-全-全-半-全-全」、「全-半-全-全-半-全+半-半」、「全-半-全-全-全-全-半」となる。

説明だけでは分かりにくいので、実際に打ち込んで聴いてみよう。

ピアノロールを開き、左上の▽ボタン→Chordを展開すると、様々なコード(次で説明)やスケールを選択できる。スケールのうちどれかを選んで、ピアノロールにノートを置くと、選択したスケールの構成音が自動的に置かれる。それらを階段状に配置して再生する。

Shift+Nで選択したスケールは解除される。

オクターブ内に全音5つ、半音2つを持つスケール(メジャー/マイナー)はダイアトニックスケールと呼ばれる。

これらのスケールは全部で7音あるが、最初の音を基準としてそれぞれにローマ数字でIからVIIまで割り振られる。

3 コード

コードとは和音のことである。高さが異なる複数の音が同時に鳴ることをいう。

コードの種類は沢山あるが、今回はよく使うと思われるものを紹介する。

・トライアド

最も基本となるコード。3つの音で構成されるコードである。

代表的なトライアドは以下のものがある。

メジャーコードは、1,3,5度の音で構成される。Cメジャーならドミソ。表記は「C(Maj)」

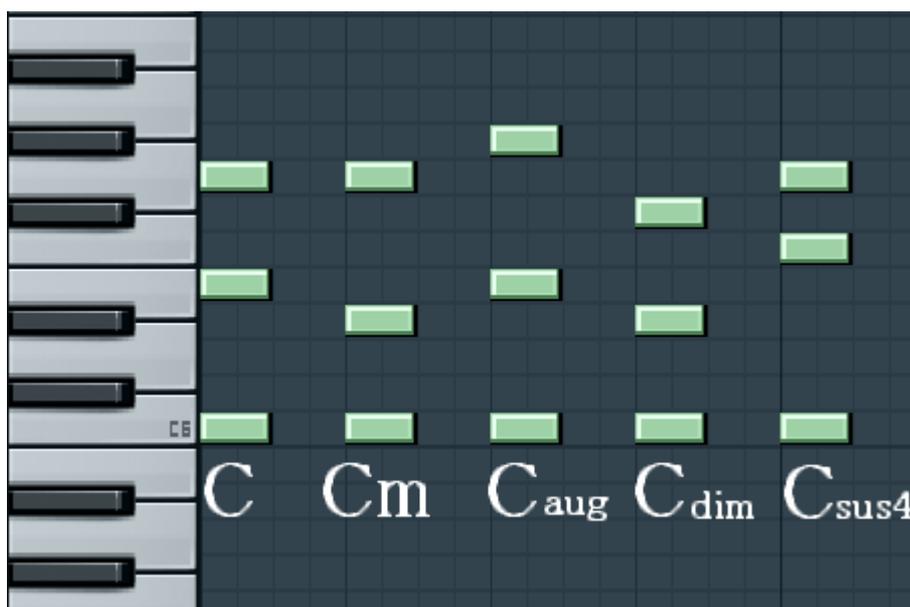
マイナーコードは、メジャーの3度の音を半音下げたもの。ドレ#ソ。「Cm」

オーギュメントは、5度の音を半音上げたもの。ドミソ#。「Caug」

ディミニッシュは、3,5度の音を半音下げたもの。ドレ#ファ#。「Cdim」

サスフォーは、3度の音を半音上げたもの。ドファソ。「Csus4」

コードを表記する際は、そのコードのルート(一番下の音)を表記する。



- セブンス

ポピュラー音楽で基本となるコード。トライアドに7度の音を足す。

- テンション

セブンスに9度、11度、13度の音を足す。

詳しい説明は省略する。

- ダイアトニックコード

先ほど説明したダイアトニックスケールのIからVIIをルートとしてトライアドコードをのせたものをダイアトニックコードという。

Cメジャースケールでは、「I=C(ドミソ)」、「II=Dm(レファラ)」、「III=Em(ミソシ)」、「IV=F(ファラド)」、「V=G(ソシレ)」、「VI=Am(ラドミ)」、「VII=Bm(シレファ)」となる。

このダイアトニックコードのI,IV,Vは以下のように呼ばれることがある。

I=トニックコード(T)

IV=サブドミナントコード(SD)

V=ドミナントコード(D)

トニックコードは、そのスケールのトニック(主音)をルートに持つコードである。特徴として、強い安定感と帰着感。コード進行の最初と最後に使われることが多い。またIII,VIをトニックとすることもできる(代理コード)。

サブドミナントコードは、トニックから4度の音をルートとするコード。

ドミナントへの移行を促す。単体ではフワフワとしている。

IIを代理コードとして使用できる。

ドミナントコードは、トニックから完全5度の音をルートとするコード。

トニックへの移行を促す。基本的にはドミナントの後にトニックを持つてくる。

III,VIIを代理コードとして使用できる。

コードの進行においてTから始まりその他の機能へ移行してTで終わることをカデンツという。

上記の性質を考えると、カデンツは

T→D→T

T→S→D→T

T→S→T

(T→D→S→T)

基本的に上記3つのいずれかである。

しかし、現在のポピュラー音楽においては必ずしも守る必要はない。

【参考文献】

川村ケン (2010)『思いどおりに作曲ができる本』リットーミュージック

村井俊夫 (2010)『作曲非常口』中央アート出版

10年度 DTM 講座第5回資料

http://www-antenna.ee.titech.ac.jp/~hira/hobby/edu/sonic_wave/interval/index-j.html

度数(音程間の間隔)や協和音・不協和音について解説

http://port.rittor-music.co.jp/guitar/column/guitarchord/19267.php?simpl_page=3#shibanzu

カデンツを手軽に体験できる